

富士に祈る 70

國學院大學兼任講師 城崎 陽子



晩年の岡野聖憲 解脫会提供

信仰と伝承 — 岡野聖憲・その24 —

先回は、昭和二十年（一九四五）、空襲によって日本各地が焼け野原になり、終戦の日を迎えるまでを記した。今回は、復興の日々を産業指導にこそし、**「我なきあと」**を因る聖憲の歩みを記す。

昭和二十一年（一九四六）は、一月一日の「天皇人間宣言」で明けた。天皇と国民は「相互ノ信頼ト敬愛」によって結ばれており、「単ナル神話ト伝説」によるものではない事、また、「天皇ヲ以テ現御神トシ、且日本国民ヲ以テ他ノ民族ニ優越セル民族」だとする考え方を、「**架空ナル觀念**」として否定した。当該の詔書によって、天皇は日本国民の民主化を果たす指導的役割との位置づけを得たのである。しかし、新たな時代が始まる一方で、国民はそれぞれの方向性をつかみきれないまま、生活に追われる日々

を過ごしていた。

一般の神社では初詣が激減した正月であった。しかし、御霊地で行われた新年会には多くの会員が集まり、聖憲と共に新年を祝った。心づくしのおせち料理を会員と食べながら談笑する聖憲の姿は、いつもと変わらなかつたが、すでにこのころから持病が悪化し、歩行が困難になりつつあったのである。聖憲が「**我なきあと**」を意識しはじめたのはこの頃からだったのではなからうか。

日本の軍国主義廃絶と平和かつ民主的な日本政治の樹立を究極の目的としたGHQの政策が次第に徹底されつつあるなか、軍国主義の象徴とも受け止められた、「**日章旗**」を掲げてはならないという指令も出された。その中で行われた二月の「**大日本精神碑建立記念祭**」は、形状が「**日章旗**」に

酷似している碑が取りざたされないか心配される中での催行であった。心配する会員へ聖憲は、「**地上太陽は人間が宇宙の本源に感謝し、日々生かされていくことの御礼を申し上げる碑である。この真理の前には敵も味方もない。**」と説いた。聖憲には、「**新たな時代**」が来ることによって、先祖が培ってきた民族的思想感情の結晶である、「**日本精神**」を過去として捨て、「**新たな時代**」のみを注視するあり方に警鐘を鳴らす心づもりもあつたのだらう。聖憲は、いかなる時代が到来しても、宇宙の本源に感謝し、日々報恩の誠を捧げて生活する、人間本来の生き方を失ってはならないことを考えていたのである。従って、交通機関も充分に復旧しない状況の中で三聖地巡拝も、春の大祭も予定通りに行われたのである。一方で、感謝会館に「**日直**」を置くことが始められた。「**日直**」

には解脫会の「指導員」をあてることにした。これは、感謝会館において聖憲自らが行っているすべての事を見せしておくことを目的とした措置である。先に触れたが、聖憲は「**我なきあと**」を見据えて様々な準備をはじめたのである。

さて、この年から聖憲が力を入れたのは「**産業活動**」であった。はじめに手掛けたのは、引揚者や戦争未亡人に仕事を提供する「**授産所**」の設置であった。授産所の事業の中心となったのは、衣料の増産であった。ポロ布や払い下げられた軍保管物資の落下傘やハンモックの紐をほどこいて糸にし、布を織りあげた。そして生産された品物は、公定価格以下で販売することが指導された。また、全国が凶作であるとの報を受けて、千葉県の海岸で採取される「**海藻**」と同様、ゴウナという貝を砕いた肥料を生産し、各地へと送った。こうした

授産事業は、当時の厚生省が新設した「**同胞援護会**」や「**引揚援護会**」といった組織との協力のもとに行われたのである。こうした聖憲の活動は、凶作もさるものながら、持てるものをすべて売り払って闇市で生活必需品を買う、いわゆる「**たけのこ生活**」や、空襲で輸送路が寸断され、特に生鮮食料品等の物資が輸送されないことによる、食料危機に対応するためであった。

また、トコロ天の無料給食がはじめられたのもこの年の七月であった。静岡県の会員に呼びかけて大量の天草を購入した聖憲は、役所の了解を得て、小学校の校庭で昼食に一人一椀のトコロ天を無料で配布した。この活動は、そのことを見聞きした会員によって、関西や名古屋方面にも広がっていった。もちろん、このような行為によってすべての人が満たされるわけではなかつた。しかし、

この行為を通じて聖憲は「**奉仕する**」ことの喜びや尊厳を、会員に知らせる心積もりがあつたのだろう。

社会的には大きな動きのあつた一年である。五月には極東国際軍事裁判が開廷された。六月には「**復員庁**」が発足し、七月には肉親の安否情報を問う「**尋ね人**」放送が始まった。九月には財閥解体への動きが始まり、十月に出された「**農地調整法改正法**」「**自作農創設特別措置法**」によって、地主制度が崩壊した。十一月には「**日本国憲法**」が公布され、十二月には石炭や鉄鋼の重点生産を行う「**傾斜生産方式**」に政策が転換され、六・三・三制の教育制度が採用された。新たな国作りが着々と整えられていき、めまぐるしく社会状況が変化していく中で、聖憲は復興を成し遂げる精神的な支柱に何を据えるかを見通そうとしていたのである。

て 弟子の内 智慧第一は舍利弗



絵・橋本豊治

釋尊の弟子は 舍利弗は 智慧第一

35

句・菅谷秀文

舍利弗（シャールリプトラ）は、釈尊の弟子。舍利弗は目犍連と幼馴染であり、一緒に出家している。

舍利弗は釈尊の弟子の中では智慧第一と言われ、真実を見抜く眼を開いたと伝えられる。釈尊の門に入った時には、彼らに従う二百五十人の修行者も弟子になったと言われる。釈尊の信頼も篤く、教団の指導的役割を担った。